

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 特別展

## 「人形一人とともにあるもの」への誘い

野口 朋子  
(学芸員)

「人形」と聞いてイメージするのは、どんなことですか？ 桃の節句のおひなさま、リカちゃん人形で着せ替え遊びなど、女の子のもの、というイメージが強いかもしれません。あるいは、念がこもっていそうでなんだか怖い、という印象を持たれることもあるかもしれません。ですが振り返ってみると、奥深い繋がりが人と人形にはあります。本展は、人形を本来の場所から切り離されたモノとして紹介するだけでなく、それらを人がどのように捉えてきたか、という関係性を考えてみたいと企画しました。

憧憬や親近感や恐怖といった感情を人形に抱くのは、それがまさしく人の姿をしているからではないでしょうか。それは人が形作り、生み出したものです。そもそも人が「人ならぬ力」を「人の形をしたもの」に託したときに、人と人形（にんぎょう・ひとがた）の歴史は始まったといえます。人形は本来、人の身代りや神霊の依代としての役割を果たしたのです。本展では、プロローグ「まもり、はらう」、第1章「願う、愛でる - 祈念の人形」、第2章「宿し、魅せる - 壇上の人形」、第3章「在り、伝える - 物語る人形」、エピローグ「人とともに」の5章を構成し、人が人形に託した役割を見ていきます。

ここで展示資料から、いくつかをご紹介します。まず第1章から、幼子の無事な成長を願って贈られた初参人形です。これは初めて天皇に拝謁する「御初参内」で拝領するというもので、明宮嘉仁親王、のちの大正天皇の人形です。袴姿と長絹袴姿の2体で、今はそれぞれ別の機関で所蔵されていますが、この度、一対が揃った本来の姿で展示をします。



初参人形 左(横浜人形の家蔵) 右(東京国立博物館蔵 Image : TNM Image Archives)

続いて第2章から、祭礼や興行という賑わいの場において衆目を浴びる壇上の人形のうち、からくり人形です。東芝の創業者である田中久重、通称からくり儀右衛門がてがけた弓曳き童子は江戸からくりの最高傑作といわれ、ぜんまいを巻くと人形が自動で矢を手に取り弓につがえて的をめぐらして放ちます。展示期間中には、実演も予定しています。



最後に第3章 弓曳き童子(久留米市教育委員会蔵)

からは、港区ゆかりの文学者にまつわる人形のうち、夢野久作が江戸川乱歩に贈った博多人形です。久作が特注で作ったのではないかと思わせるほど、



博多人形(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵)

乱歩の物語世界にいるかのような、妖しい魅力に満ちた舞妓の人形です。以上、紹介したほかにも、港区域に屋敷を構えていた大家に伝来した雛人形や幕末明治期の浄瑠璃人形、赤穂事件の義士人形や祭礼の山車人形など、多彩で魅力的な人形を展示いたします。

生活必需品ではない人形が、古代から現代に至るまで連綿と作り続けられてきたのは、人が人形にさまざまな想いを託し、人に寄り添う存在として人形を捉えてきたからではないでしょうか。本展では港区にゆかりのある人形を中心に、多様な人形をご紹介します。人と人形の関係性もたらず文化的様相や、ご自身と人形との関わりについて思いをはせていただく契機となれば幸いです。



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 地下から見つかった江戸城外堀

杉本 絵美  
(学芸員)

**高**層ビルが立ち並ぶオフィス街の一角、港区西新橋一丁目1番で平成31(2019)年1月から4月にかけて、遺跡の発掘調査が行われました。調査では木樋や枡といった上水施設が発見された他、江戸城の外堀の石垣が発見されました。実は、この辺りはかつて江戸城の外堀があった場所だったのです。慶長9(1604)年から寛永13(1636)年にかけて行われた江戸城普請の最後の大事業として、江戸城の外周に総延長約14kmに及ぶ堀が築かれました。外堀の築造は100家以上の大名によって行われ、約1万個の石が伊豆半島周辺で切り出され船で江戸に運ばれてきました。

江戸城西側に位置する外堀は国の史跡として現在も残されていますが、江戸城東側の外堀は明治時代に入り都市化が進むとともに埋め立てられました。虎ノ門から幸橋にかけての外堀は明治36(1903)年頃に埋め立てられ姿を消したのですが、今回の発掘調査によって地下に眠っていた江戸城外堀の石垣が見つかったのです。



『尾張屋板切絵図 増補改正 芝口南西久保愛宕下之図』(部分)

石垣は、明治時代の埋め立ての際に壊されたと思われる状態で見つかりました。石垣に使われた石(築石)の大きさは長さが1mを超えるものもあり、その中には、石を割るためにつけられた「矢穴」と呼ばれる長方形の穴が残されたものや、普請を担当した大名家の一つである豊後佐伯藩毛利家の家紋と思

われる「矢筈」が刻印されたものもありました。

この場所では昭和50年代にも工事中に外堀の石垣が発見されており、この時に発見された築石は、今回発掘調査が行われた遺跡に隣接する場所(西新橋



築石に刻まれた「矢筈」

1-2)で石垣状に積み上げられ、道行く人々が見ることができるようになっていました。一方、今回の発見は再開発事業に伴い行われた発掘調査によるもので、取り上げられた築石の内7個が再開発地区の敷地の一角に公開展示されることになりました。石は通路脇の緑地帯に弧を描くようなデザインに配置され、令和3(2021)年7月から公開されています。

隣り合う敷地で見ることができる2か所の築石は、発見された経緯は違いますが、どちらもその土地を開発した人々の、歴史や文化財を大切にしたいという思いが、未来に伝える形として残すことができたものです。お近くにお出かけの際は、是非これらの築石を探してみてください。

築石が公開されている様子  
(上:西新橋1-2 下:西新橋1-1)